

『坂の上の兄妹 前篇』

兄妹と一人の女

兄妹の家。妹と女。

次男、来る。

次男「ただいま」

妹「おかえり」

妹「どこ行ってたの」

次男「友達のところ」

次男「暑い」

次男「アイスクリーム、あったかな」

妹「ああ、あれ、あれ食べた」

妹「おなかすいたね」

妹「おなかすかない？」

次男「うん」

妹、台所から戻り、せんべいを食べる。

女、笑う。

妹「あ、一枚しかなかった」

次男「誰」

妹「下で、へたばってたから」

妹「水が欲しいって言うから、水くらいならどうぞって、上がってもらった」

女「こんにちは」

次男「こんにちは」

女「すみません。すぐ、帰ります。ちょっと、ぼーとしちゃって」

次男「あ、どうぞどうぞ」

女「すみません」

妹「熱中症じゃないですか」

女「いやいや、そんな。大丈夫です。も、だいふ、休んだので、帰ります」

次男「兄さんは？」

妹「二階じゃない」

次男「いつ、帰るって？」

妹「明日だって」

次男「ふーん」

妹「だから、今日、墓参りだって」

次男「あそう。そうか」

墓参り

長男、次男、妹。そして、やや離れて女。

長男「誰か、花、あげてくれたのか」

妹「となりの、吉成さんじゃないかな」

長男「来年は、花ぐらい供えよう」

長男「線香だけじゃ、さみしいかな」

妹「下の店で売ってたから、買ってこようか」

長男「いいよ、もう」

妹「お父さん、よろこんでるわよ。よう来てくれたって」

長男「なんか、言えよ」

次男「え」

長男「なんか、唱えろよ。お経とか」

次男「いやだよ」

長男「弟は、仏教の大学に通ってたんです」

女「ああ」

次男「宗派、違うから」

妹「うち、なに宗？」

長男「さあ、臨済宗かな」

次男「曹洞宗でしょ」

長男「え、臨済宗だって」

次男「曹洞宗だよ」

長男「とにかく、仏教だよ」

次男「そこで、まとめたらいかんでしょ」

長男「禅宗、かな」

次男「しっかりしてよ、長男なんだからさ」

長男「じゃ、いいよ、曹洞で」

次男「なんだよ、それ」

長男「調べとくよ」

みな、手をあわせる。

墓参の人々、次から次と道を上って行く。

兄弟は、挨拶する。女も、あわせて、挨拶する。

え、お嫁さん？とか、聞かれて、いえいえと反応する。

次男「来年は花火、しようか」

妹「うん」

長男「あの、お名前をまだ、聞いてませんでした」

女「上野と言います」

妹「左知子さん」

女「あ、ええ、上野左知子です」

長男「あ、さちこさん」

女「幸いな子ではなくて、佐藤の佐に、知るです」

長男「そうですか」

女「はい」

女「花火の音、すごいですね」

中華料理

長男、次男、妹、女。

長男「ここの、皿うどんが一番おいしいんです」

女「そうですか。いや、ほんと、おいしかったです」

長男「二年前、父を亡くしました。先祖の供養の仕方とか、ちゃんと聞いておけばよかったんですが、ま、掃除と線香あげるぐらいでいいかなって。だから、長崎のお盆独特のことはやれませんでした」

女「あ、いえ、でも、よくわかりましたよ」

妹「去年は初盆だったから、親戚の人たちも来たんです」

女「そうですか」

妹「佐知子さんは九州を旅してるのよ。東京で恋人と別れて。だから、これは感傷旅行なんですよね。ということは、誰か、いい人いないかな、いい人いないかなって、思いながら、長崎を歩いてたわけなんですか」

女「いや、そんなことはないけど」

妹「うちの下の石段でくた一ってなってたから、声かけたんだけど、ほんとよかった、だって、兄さんも、独身だし、兄さんと一緒になったらいいんじゃないかなって私、ぴんときたのよ」

長男「おい、ちょっと、失礼じゃないか。すいません」

女「あ、いえ」

次男「おまえに、そんな魂胆があるとは思わなかったな。えっと、お名前なんでしたっけ」

女「上野です」

妹「佐知子さん」

次男「あ、そうだ、佐知子さん、ビールどうですか」

女「あ、すいません」

妹「魂胆ってなによ」

次男「背、高いですね。うらやましいな。何センチですか、身長」

女「ええと」

妹「ね、兄さん、左知子さんを稲佐山に案内してあげてよ。だって、夜景、まだ見てないんでしょ」

女「え、ああ、でも」

妹「大丈夫大丈夫、いいわよね、兄さん」

長男「ああ、ま、いいけど。じゃ、行きますか」

女「あ、はい」

次男「長崎は初めてですか」

女「ええ」

次男「どこ、ですか」

女「えっと、いま、住んでるところですか」

次男「ええ」

女「横浜のほうですが」

長男「ご出身も？」

女「もともとは関西のほうだったらしいけど」

次男「じゃ田舎でしょ、長崎」

女「いえ」

妹「だって、東京からしたら、どこも田舎よ」

長男「仕事、ないですからね。こっちに住んでないんです、みんな」

女「え、あ、そうなんですか」

妹「私が週に一度帰って、家の窓とかあけたりはしてるんですけど」

女「ああ」

女「え、じゃ、みなさんどちらにお住まいなんですか」

長男「私は東京です」

次男「大阪です」

妹「福岡です」

女「へー」

妹「この街に、ずっと、いると息がつまります。旅行で、ちょっとだけ滞在するくらいが一番

いいですよ」

『坂の上の兄妹 後篇』

夜景、稲佐山

山頂、展望台。

長男、女。

長男「世界三大夜景だそうです」

女「そうですか。きれいですね」

夜

家。

なかなか眠れない女。

深いため息。

次男のお経が聞こえる。

夜明け前

家。

女、起き上がり、居間へ。

そこには、妹がいる。

女「あ、ちょっと、お水飲みたくて」

妹「冷蔵庫に、麦茶あります」

女「あ、ありがとう」

女、戻って来て。麦茶を、飲む。

妹「街に太陽が差し込む前、ほんの一瞬、街に音がなくなるんです」

妹「路面電車が、走り出すまでの、この時間が好きです」

街からの路面電車の音。

女「あ、ほんと、電車の音、聞こえましたね」

妹「引き返せないな、って思いますよね。これ聞くと」

女「え、あ、そうですか」

妹「人にこんなことしゃべったことなかった。でも、誰かに聞いて欲しいとも思っていた。だから、よかったです」

女「なんか、邪魔したんじゃないのかな、私」

妹「あなたは慎ましい人だ」

妹「このままにも始まらないで欲しいって考えていたことが、もう、駄目になって、あそこ、あのときの音のない街に一瞬住んでいたことが、また、ありえるだろうかって、こうしてここで、また、その時を待つわけなんです」

美術館にて

ロビー。

女物の帽子を男に渡す。

女「ベンチにこれ、あったんで」

男「あ」

女「ご一緒されてたかたのじゃないかなって思って」

男「ありがとうございます」

女、常設展のほうへ去る。

男も、それを見送り、去る。

美術館の常設展コーナー。

女が一枚の絵「樹骨」の前で座っている。

男が来る。

男「あ」

女「あ」

男「さっきはどうも」

男「池野清の遺作ですね」

女、立ち上がり、去る。

男は後を追う。

男「あの、すみません」

男「あ、あの、コーヒーとか、飲みませんか」

喫茶コーナー。

男と女。

男「佐多稲子は池野清をモデルに小説を書いています。『色のない画』と『樹影』です。読まれました？」

女「いえ」

男「池野清に興味があるんですか？」

女「いえ」

男「だいぶ熱心にご覧になってたから」

女「ちょっと休んでました。いろんなもの見たから、疲れちゃって」

女「あの、さっきのかた、いいんですか、ほっといて」

男「え、ああ、いいんです」

女「でも、そんな、もう行ってください。探してるんじゃないですか」

男「いや、いいんです、ほんと。もう帰ったんじゃないかな」

男「それに、さっきの絵を見ても、魚の骨にしか見えないって言うような人だから」

女「だって、骨に見えますよ」

男「見えますが、あれはそんな絵じゃない。鋭い幹だけになり、一切の枝葉を捨て去った三本の木が、背景と混在しつつも必死でその極端な形状を浮かびあがらせようとしている。いや、こちらのほうに出て来ようとしているのか、向こうへ消えゆこうとしているのか、わからない。これは、まさに原爆症で死に逝こうとしている画家の姿そのものなんです」

男「それに、あなたにも、こんなこと言うのは、あれですけど。箸休めのような役目で、あの絵はあるんじゃないんです」

女「あの、私、もう帰らなきゃいけないんで」

女「東京に戻ります」

男「そうですか」

男「すみません。お引き止めして」

女、立たない。

男「お時間、大丈夫ですか」

男「教え子だったんですけどね。私、高校で教師してまして。彼女は大学卒業してこっちに就職で帰って来て、つきあうようになったんだけど。やっぱり、年が離れてるっていうか、なんていうか、先生だったからですかね、頼られるっていうか。まあ、とにかく、話があわないんですよ。けんかばかりで、それも、最初のうちはいいんですけど、最近、ちょっともう、限界かな、と思って」

女「なんでそんなこと話すんですか」

男「え、あ、すみません」

女「そんな話を私が聞きたいと思ったんですか」

男「いえ」

女「いや、そうでしょう」

男「いやいや、そうじゃないですよ」

女「私、あなたが、あの女の人とどうなってようとかまいませんよ」

男「ええ、そりゃそうです」

女「それなのに、あなたが私にそんなことを話したくなかったのは、私に原因があります」

男「え、あ、そうですか。そうかな」

女「私は、どうも、もの欲しげな顔をしてるんです」

男「いや、そんなことはないですよ」

女「そうなんです。そういうことらしいんです」

男「そうですか」

女「それに」

男「え？」

女「それに、あなたは押し付けがましい」

男「なにがです」

女「あの絵は原爆症で死に逝こうとしている画家の姿そのものではないでしょうか。そうかもしれませんが。きっと、そんなふうに鑑賞するのがあの絵の正しい見方でしょう。でも、あの絵に魚の骨を見てもいいじゃないですか。押し付けがましく、なんでもかんでも原爆に結びつけることはないし、魚の骨に見えたことのほうに可能性があるんじゃないですか」

男「そんなことはわかってますよ」

女「じゃ、なんで作品に正解があるかのように解釈するんですか」

男「いや、むしろ、原爆のイメージから遠ざかるのはどうかって言いたいです。自由に鑑賞するのもいいけど、あの画家があの作品に込めた主題をないがしろにすることはできません」

女「だからなんで決めつけるんですか」

男「決めつけるもなにも、そういうものなんです」

女「そんな。そんな頭ごなしな言い方してたら、彼女じゃなくっても、誰もがあなたから離れていきますよ」

男「いいですか、作品にはちゃんとした最低限の解釈の道筋というものがあって、それからはずれて間違っただけのものを良しとするのは作者への冒瀆なんです。それに、今こそあの絵は、きちんと再評価される必要がある。東京から来る見栄えのいい企画展ばかりがもてはやされて、池野清なんか忘却の彼方でしょう。私はそれが悲しい。とっても辛いんです。あ、そうですね。そうかもしれない。私が孤立するのはこんなふうにものごとをはっきりさせないと気が済まないからでしょうかね」

女「今度は開きなおってニヒルになるんですか」

男「あなたですよ。私からは人が離れていくって言ったのは」

女「こんなこと言うのは失礼ですけど、教師特有のオーラがありますね」

男「ああ、よく、そんなこと言われたりするんで、そんな嫌みも慣れてますんでおかまいなく」

女「そうですか。そんなことに慣れるなんてお気の毒です」

男「だから、ほっといてください」

女「声をかけたのはあなたですよ」

男「そうですけど、これも、ご自分でおっしゃったんで、言いますが、もの欲しげだったんです。あなたが。私が、声をかけたのは、あなたに原因がある」

女「ええ、そうです」

女「私は昨日帰るつもりでした。でも、ここままじゃ、帰るわけにいかないって思って、一日延ばして、炎天下の長崎を歩き回ってたら、ばてちゃって、石段でぐったりしてしまっ、そしたら、声かけられました。私、その時も、きっと、もの欲しそうにしてたんです。欲しかったのは水ですけど。で、その石段の近くの人が親切にしてくれて、家で休んで行けばって言うてくれて、私、その家にお邪魔することになって。そこには三人兄妹がいて、でも、普段はその家には誰もすんでないらしくて、ちょうどお盆でみなさん帰ってきていて、なんか、皿うどんとか食べたり、お墓参り一緒に行ったりしたんです。長男の人は結婚してなくて、一番下の妹さんが、なんか、私に、うちの兄さんどうですかとか、気つかったりして、どきどきしました。どきどきというより、戸惑いだから、どぎまぎです。それにその長男さんはタイプじゃなかったし、どちらかといえば、苦手でした。そういう意味では、あなたのほうがいいですよ」

男「なんですかそれ」

女「それでも、ロープウェイで稲佐山からの夜景を見に一緒に行きました。下りのロープウェイはものすごく混んで、ロープウェイ全体がガラス張りで、そこにぎゅうぎゅうに詰め込まれて、さあ、何人入れるでしょうみたいな状態で乗りこんで、ああ、どうせ密着するのならこの長男さんじゃなくて他人がいいって咄嗟に思ったけど、あからさまに離れる態勢で乗り込むのもどうかなって思ってたら、手、つかまれたんです」

男「え、その長男さんがつかんだんですか」

女「そうそう。え、あ、でも、手ぐらいいいかって、なかなか思えなくて。というか、そんな思案する間もなく、やめてください、って言ったんです」

男「え？」

女「やめてくださいって」

男「もう一度言ってください」

女「だから、やめてください、です」

男「ああ。え、でも、なんでそんな言い方なんですか」

女「え。なんでって、やめて欲しかったからです」

男「いや、それはわかりますが。なんで、そんな、押し殺したような声で言ったんですか」

女「じゃ、おおきな声で叫べばよかったんですか？」

男「そうじゃないけど」

女「なんか、混んだ山の手線の中での、やめてくださいって感じになって」

男「ああなるほど、長男さん、痴漢みたいなことになったんですか」

男、笑う。

女「あなたは、そうやって、人のことを笑ってればいい」

女「私、どういうわけか、その夜、眠れませんでした。当然と言えば、そうなんだけど。まったくの他人の家に初めて泊まるわけだし、あんなこともあったし。それにしても、なんで全然眠れなかったのか、わからない。いや、わかってるけど、ただ、はっきりするのが怖いのかもしれません」

女「確かに私は、なにかが欲しかったんです」

女、去る。

男、残される。